

給飼濃厚飼料レベルが放牧肥育豚の生産性に及ぼす影響

廣 瀬 潤
(農学部附属農場)

目 的

現在、舎飼方式が豚の肥育方法として主流を占めている。しかし、舎飼肥育として事業を展開するには、土地の整地・肥育豚舎の建設等の初期投資が甚大なものとなる。そのため、事業を始める人には、大きな負担となっている。

そこで本研究では、初期投資を低く抑えることが出来る放牧肥育における給与体系の基礎研究を行うことを目的とした。

方 法

豚を放牧肥育する実験牧区は、ワラビおよびチカラシバが優勢する荒廃草地において、庇陰舎・飼槽および飲水施設を有する約10a (25×40m) の放牧区と、放牧区の周囲に禁牧区を設けた (図.1)。放牧肥育は、2003年4月29日に3元交雑豚を各牧区10頭 (LWD, 平均体重43.3kg) を用いて行い、110kg前後で順次出荷終了とした。放牧区は、TDN76.5%の配合飼料 (JメイトB 経済連) を用いて、舎飼時に0.8kgの日増体量 (DailyGain以下DG) を見込めるように設定した対照区、対照区の80%水準 (以下80%区) および、60%水準 (以下60%区) の3区を設けた。また、各区における飼料給与は、一日一回午前9時とした。

実験放牧肥育における調査は、体重測定および被植率を一週間隔で、個体維持行動観察を肥育前期および後期に各区4頭行った。また、出荷した豚については、産肉評価を行った。

結 果

対照区と比較して80%区では、肥育日数およびDGにおいて大きな差異は見られなかった。しかし、60%区では、肥育日数において約25日遅延し、DGにおいては0.16kg低下した。また、飼料効率 (増体重を総給餌量で除した値) は、対照区と比較して80%区および60%区において約0.05優秀であった。このため、80%区および60%区の方が、飼料コストの観点からすると優秀であった (表.1)。しかし、60%区では、出荷時期が早かったために屠体重および枝肉単価の低下を招いた。その結果、粗利益の面では、80%区、対照区、60%区の順に優秀であった (表.2)。

以上の結果を総合すると、肥育日数が少ない事による回転効率および飼料コストから見て、80%区が最も優秀であった。

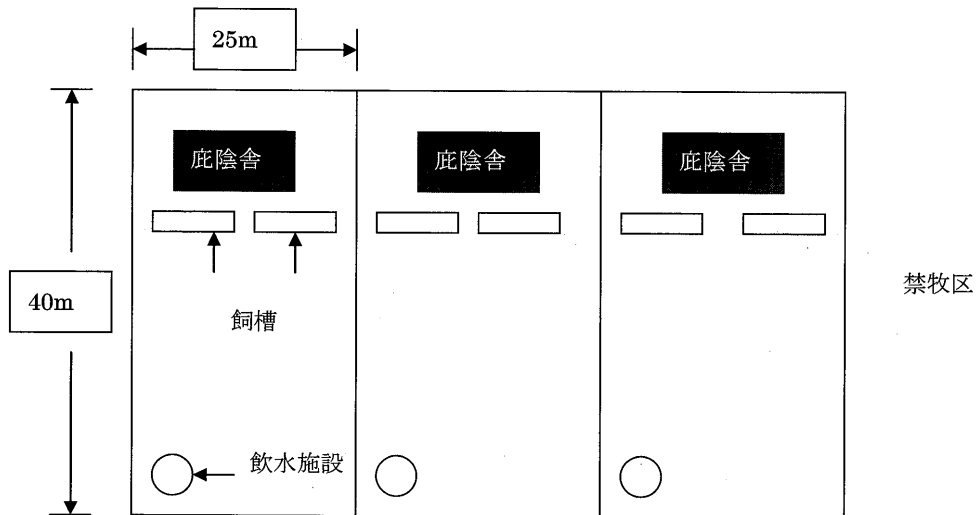


図.1 放牧区の略図 (左から対照区、80%区、60%区)

表.1 各区における肥育成績

処理	入荷体重	出荷体重	増体重	日増体重	肥育日数	総給餌量	飼料効率
cont	42.3	110.6	68.4	0.59	118	383.3	0.18
80%区	44.4	112.1	67.7	0.59	117	304.8	0.23
60%区	43.3	104.5	61.2	0.43	143	282.2	0.22

表.2 各区における肥育コストおよび粗利益

処理	給餌額	仕入額	と体重量	背脂肪厚	単価	総額	歩留まり	粗利益	利益/日
cont	11500	15000	65.2	1.15	317	20705	0.59	-5795	-48
80%区	9145	15000	66.8	1.08	315	21093	0.60	-3052	-23
60%区	8465	15000	60.6	0.76	274	16818	0.58	-6647	-44